

金の魚

小川未明

青空文庫

昔むかし、あるところに金持かねもちがありました、なんの不自由ふじゆうもなく暮くらしていましたが、ふと病氣びようきにかかりました。

世間せけんに、その名なの聞きこえたほどの大金持おおかねもちでありましたから、いい医者いしやという医者いしやは、いずれも一度どは呼よんで、みてもらいました。けれど、どの医者いしやにも、その病氣びようきの名ながわかりませんばかりでなく、それをなおす見込みこみすらつきませんでした。そのうちに金持かねもちはだんだん体からだが悪わるくなるばかりでありました。

そのとき、旅たびからきた上じようず手うらなな占しやい者しやがありました。その男おとこは、過去かこいつさいのことをあてたばかりでなく、未来みらいのこともいつさいを秘術ひじゆつによつてあてたのでありました。

かねも
金持ちは、せめてもの思い出に、自分の不思議な病氣についで
占ててもらふことにいたしました。占いは、かねも
占つて、いいますのには、

「こんな病氣は、またと世間にあるような病氣でない。どこ
が悪いということなく、だんだん血の氣が体からなくなつてしま
つて、そして、ばたりと倒れて死んでしまうのだ。この病氣は、
どんな名医にかかってもなおらない。ただ一つこの病氣のなお
る薬がある。それは、めつたに獲られるものでないが、金色の
魚を食べるとなおってしまう。この魚は、まれに河の中にすんで
いるものだ。」と、その占いはいいました。

かねも
金持ちは、金色の魚を食べれば、この病氣がなおるとい

ことを聞きますと、絶望のうちにかすかな希望を認めたのであります。金はいくらでもあるから、金の力で、この金色の魚を探しだそうと思つたのであります。

そこで、国中に、

「金色の魚を捕らえてくれたものには、千両のお礼をする。」
 といふふらしたのであります。

世間の人々は、このうわさを耳にすると大きわぎでありました。そこにもここにも、寄り集まって金色の魚の話をしたのであります。

「金色の魚なんてあるものかい。」と、甲がいますと、

「それは、あるそうだ。あるとき、女が河で菜つ葉を洗っている

と、目の前に金色の魚が浮いて沈んだことがあるそうだ。そればかりでない、昔から、幾人も金色の魚を見たものがあるということだ。」と、乙がいました。

「五、六年前も、この町のはずれを流れている河で金色の魚を見たものがあるそうだ。」と、丙がいました。

そこで、金色の魚はかならずしもいないわけではないというので、町の人々はもちろん、村の人々までみな金色の魚を捕らえて金持ちのもとへ持ってゆこうと思わないものはありませんでした。

河辺には、毎日幾百人ということなく、無数の人々が両岸に並んで釣りをしました。そして、金色の魚を自分が釣る

うと思つたのでありました。

毎日、毎日、中には自分の仕事まで休んで河にやつてきて糸を垂れているものもありました。

「なに、仕事ぐらい休んでも、金色の魚を釣ったら千両になるんだ。そうすれば、一生なにもせんで楽に暮らしてゆけるから。」
 というのでありました。

金持ちは、また、毎日、毎日、今日はどこからか金色の魚を捕らえて持つてきてくれはしないかと、そればかり待ちあぐんでいました。けれど、どういうものか、金色の魚はなかなか取れませんでした。

河辺へゆくと多くの人々が、口々に金色の魚は、まだ釣

れないだろうかといつていました。

「まだ、釣れたという話を聞かない。」と、一人がいいますと、

「それなら安心だ。金色の魚は、俺が釣らなけりやならぬ。」

と、一人はいつて、自分がその千両の金をもらう覚悟で、根気よ

く糸を垂れているのであります。けれど、そこにも、ここにも釣

れる魚は、みんな黒色のものばかりであつて、一つとして金

光りを放つ大魚はかからなかつたのであります。

一方金持ちの病気はだんだん悪くなるばかりでありました。

占い者が金の魚を食べればなおるといつたけれど、そんな金の魚

は、この世の中に棲んでいないのかもしれない。たとえ棲んでい

ても、自分の不運のために、その魚が針や、網にかからないのか

もしれないと金持ちはなげいていました。

金持ちは、外へ出て河のほとりへいつてみますと、どこの河辺も人でいっぱいでありました。みんな金色の魚を捕らえようとしているのです。

「これほどまでにしても、金の魚がかからないなら、まったく、俺の運が付きただ。」と、金持ちはつくづくと我が身の上を悲しんだのでありました。

金持ちは、これだけの金を持ち、土地を持ち、なに不足なく暮らすことができ、そのうえに、年も、まだそう老ったわけでないのに、これをみんな残して、自分独り死んでいってしまうことは、なんとという悲しいことだろうと思いました。

「どうしたら金色の魚が捕らえられるだろうか。」と、金持ちは思い惑いました。

名人の占いは、もはやこの町にはいませんでした。旅から旅へ、渡り鳥のように歩く占いは、どこへか行ってしまったのです。金持ちは、いまさらそのことを占いにたずねることもできなかつたのであります。

ある夜、金持ちは不思議な夢を見ました。自分は、遠い南へ旅をしたのであります。それは暖かな、明るい国でありました。いろいろな町を通り、いくつかの船のたくさん泊まっている港を見て過ぎました。そして、ある日のこと、目の前に、みかんのなつている山をながめました。

旅人は、あるときは船に乗ったり、あるときは馬に乗ったり、またあるときは歩いて、ここまでできたのであります。山はそんなに高くありませんでした。冬の季節でありましたけれど、林の下には、緑の草が一面にしげっていました。この国には、冬というものがないのです。その山を上りますと、あなたに海がありました。海の上は眠るように穏やかでありました。海のほとりに町がありました。いろいろの建物とその頂を青い空にそびえていました。つばめがさえずりながら町の上を飛んでいました。

その町の中に、赤い旗が、長いさおの先にひらめいています。それは、万病を治す不思議な温泉のわき出るところであります。

その温泉へいつて入つて、病気がみななおつてしまったのです。そんな夢を金持ちは見たのでありません。

目がさめてからも、金持ちは、夢に見た景色がありありと残つていて忘れることができませんでした。

「ほんとうに、そんなところがあるのではなからうか。」と、考えていました。

すると、ちようど町に入つてきた薬売りがありました。金持ちは、薬がきいても、きかなくても、薬売りが入つてくれば、かならず買ったのであります。

「おまえさんは、諸国を旅してまわんなさるが、もしやみかんのなる山のふもとで、海のほとりに町があつて、そこからよくき

く温泉おんせんの出るところをお知りになりませんか。」と、金持ちかねもちは、薬売りくすりうにたずねたのであります。

「そういうところは、私わたしは、幾か所いくしよも見みました。みかんの園そのやまが山にあって、その下したに海うみがあつて、町まちのあるところところで温泉おんせんの出るところは、幾か所いくしよも見みました。」と、薬売りくすりうはいいました。

「なんでも私わたしが夢ゆめに見みたのは、赤い旗あかがひらひらとひるがえつていました。」と、あわれな病びょうにん人の金持ちかねもちはいつたのです。

「赤い旗あかのなびはたいていと、ああ、それはここからたいへん遠とおい南みなみの国くにでありますよ。私わたしが、たしかに見覚みおぼえがあります。しかし、その町まちを過すぎたのは、三年ねん前まえでした。」と、薬売りくすりうは答こたえました。

かねも
金持ちは、いろいろその町のことを薬売りから聞いて深い思
いに沈しずんでいました。

ある日ひ、かねも
金持ちは、たぐさんのお金を馬うまに積つんで人の知しらぬ間
に、南みなみの国くにを指さして、今こんじよう生おもの思おもい出でに朝あさ早く旅たび立ちをしたの
でありました。

それとも知しらずに、人々ひとびとは、なお毎まい日にち、河かわのほとりにきて、
釣つりをしていました。

「いつになつたら金こん色じきの魚うおがかかるのだろう。」と、口々くちぐちに
あくびをしながらいつていたのであります。千両りようの金かねになれば、
いくら仕事しごとを休やすんでもけつして損そんにはならないと思おもつたからであ
りました。

けれど、金色の魚は、ついにかかりそうもありませんでした。あまり性質のよくない、甲と乙と丙は、ある日、三人寄り集まつて、

「金色の魚があるなんて、うそのことだ。ほんとうにいまましい。ひとつみんなをだましてやろう。そして、もし、金色の魚がここにいる三人のだれかにかかったら、千両もうけて三人で分けることにしよう。」といって、三人は、ふなを捕らえてきて、それに金箔を塗って、幾ひきも河の中に放つたのです。

ある日、河ばたでさわぎがありました。

「金色の魚がかかった。金の魚がかかった。」と、釣りあげたものがいいますと、

「金の魚が釣れた、金光りのする、ほんとうの魚が釣れた。」
と、口々にいって、みなそこに集まってきました。

すると、また、同じ時刻に、

「ここでも金の魚が釣れた。」という声がした。

人々は大きわざをして、

「あすこにも金色の魚が釣れた。」といって、その方に走つて
ゆきました。

みんなは、金色の魚を捕らえた人をうらやみました。そして、
わいわいとその人を取り巻きながら金持ちのいる町の方を指して
ゆきました。

「二人に、金色の魚がかかったから、金持ちは二千両出すだろ

う。」と、あるものがないと、

「なに一人ひとりにしか出だすまい。それとも同じ日おなじひに捕とらえたのだから、五百両りょうずつであるかもしれない。」と、わいわいといつてゆきました。

みんなは、金持かねもちの家の前うちまえまでゆきますと、その家うちはあき家やになつていました。

「大金持おおかねもちが、どこかへ行ってしまふようなことはない。ちよつと近所きんじよへいったので、すぐに帰かえってくるだろう。」といつて、みんなは家の前うちまえで待まっていました。けれど、日ひが暮くれかかっても帰かえつてきませんでした。

金きんの魚うおを釣つつた二人ふたりのものだけは、まだ家うちの前まえに立たつて待まつて

いしましたが、あとのみんなは、いつしか自分の家へ帰ってしま
ました。

二人のものは、てんでに自分の捕らえた金の魚が死なないう
に大事にして、それを守って金持ちの家の前に立っていました。
そして、心の中で、どうかして相手の金の魚が死んでくれればい
いと祈っていました。そうすれば、とどこおりなく、千両の金が
自分一人の手に落ちると考えたからであります。

二人のものは、たがいに顔をにらみあつてもものもいわずに、一
夜、その家の前に立ちあかしました。

けれど、翌日になつて、日はいつしか高く上がったけれど、
金持ちの帰ってくるけはいはなかったのです。その中に二人のも

のは腹はらが減へつて目めがまわつてきました。

そんなこととは知らしず、金持かねもちは、南みなみへ南みなみへと旅たびをつづけてい
ました。

ふたり 二人ふたりのものは、金きんの魚うおを殺ころさないように、大だい事じにして、毎まい日にち、
昼ひるも夜よるも、金持かねもちが帰かえつてきたら我われ先さきに金きんの魚うおを金持かねもちに渡わたそ
うと思おもつて家うちの前まえに待まっていました。すると、だれいうとなく、
金きんの魚うおは、ふなに金きん箔ぱくを塗ぬつて河かわに放はなしたのだということことがわ
かりました。二人ふたりはたいへんがっかりして、捕とらえた魚うおを河かわへ捨す
ててしまいました。

金持かねもちは、いつまでたつてもきませんでした。そして、あき家や
になった家うちはいつしか荒あれはててしまいました。広ひろい屋敷やしきには草くさ

がしげって、秋あきになると虫むしが鳴なき、春はるになるといろいろの花はなが咲さきました。

その後ごの金持かねもちの身みの上うえについては、だれも知しっているものがありますでした。おそらく、南みなみの方ほうの知しらない町まちをたずねてゆくうちに、どこかで病びょうき氣おもが重おもくなつて死しんだのだらうといふことです。

しかし、不思議ふしぎなことに、河かわには、それからというものは、金こ色んじきの魚うおがたくさんにふえました。人々ひとびとが釣つりをしていると、

たびたびその糸いとにかかりました。また網あみにもかかつてきました。

けれど、金持かねもちのような病びょうき氣おもが、またとその町まちにはなかつたから、金きんの魚うおを食たべたものがありません。そればかりでなく、金きん

の魚^{うお}は、食^たべるものでないといういい伝^{つた}えになりました。

いまでも、その町^{まち}の名物^{めいぶつ}は、河^{かわ}に金^{こん}色^{じき}の魚^{うお}がしぜんにかくさん棲^すんでいるということです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 一」講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第7刷発行

初出：「面白俱樂部」

1921（大正10）年1月

※表題は底本では、「金《きん》の魚《うお》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2013年12月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

金の魚

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>